

# 分析的エスノメソドロジーと ポスト分析的エスノメソドロジー

中 村 和 生

## はじめに

H. ガーフィンケルが陪審審議の調査研究に参加していた1954年に、自らの目指す研究を「エスノメソドロジー」と命名して以来、ほぼ50年になる [Garfinkel 1974]。そして、この方向性は様々な研究を生み出し、今日に至っている。しかしながら、今日、エスノメソドロジーに関連する研究領域として最も知られているのは会話分析であり、また、会話分析を除いたエスノメソドロジーは過去の遺産としてしかみなされていないようにも思われる。過去の遺産として挙げられるエスノメソドロジーの最たる研究はガーフィンケルの期待破棄実験であろう。例えば、A. ギデンズの『社会学』[Giddens 2001] を見ても、期待破棄実験が挙げられ、つづいて、すぐに会話分析の手法に基づき会話断片が分析されていく<sup>(1)</sup>。そして、たしかに、期待破棄実験を行った研究の方向性とは異なり、会話分析は様々な分析的知見を見いだしてきた。会話分析はもはやエスノメソドロジーとは全く独立の言語学的営為、たとえば、機能主義言語学の一端を担う研究プログラムであるとみなされることもある [Coulthard 1985]。

本稿は、拙著たる博士論文 [中村 2014] のいくつかの論点などを用いて、こうした見取りに代替案を示すことを狙いとする。そのために、まず、M. リンチが提唱するプロト・エスノメソドロジーとポスト分析的エスノメソドロ

ジーという考え方を導入する。さらには、それをふまえつつも、この分類を拡張させて用いることで、エスノメソドロジーと会話分析との一つの関係性を提案したい。

つぎに、会話分析を行うにあたって E. シェグロフが課した2つの制約について考察していく。考察をとおして、会話分析においては、「手続き上の帰結」という制約が、会話分析の創始者たる H. サックスが見いだしたメンバーシップ・カテゴリー化装置 (MCD) というアイデアの使用を事実上拒否しており、そのことは会話分析の分析的発展にとっては十分な理由があることを確認する。

そのうえで、ガーフィンケルが述べる「方法にかんする固有な妥当性要件」を導入する。この要件からすれば、およそ相互行為が織り成されている場において、その場の成員にとって、MCD はレリヴァントなものとしてたち現れており、そうである以上、会話分析がもたらしたシーケンスの組織化にかんする知見と MCD というアイデアを併用するという分析方針があるべきであるという主張を行う。くわえて、これを若干の経験的例証によって補う。そして、さいごに、この分析方針と分析的エスノメソドロジーたる会話分析のプログラムとの関係について考察する。

## 1 プロト・エスノメソドロジーとポスト分析的エスノメソドロジー

では、まず、エスノメソドロジーをさらに発展させていくために M. リンチによって提唱された、プロト・エスノメソドロジーとポスト分析的エスノメソドロジーという考え方を見ていこう。この区別において目指されるべきものである、ポスト分析的エスノメソドロジーとは、「エスノメソドロジストが研究する社会的な関わり、局所的な判断、具現的行為から、学問的「分析」をどういうわけか何らの仕方で、切り離すことが可能」[Lynch 1993 : 141=2012 :

178] とするプロト・エスノメソドロジー的態度をとらないことを主軸としている。

この主軸から導かれる、両者を区分けする基準は2つにわけて考えられる。まず、学問（的分析）を社会的行為から切り離す一つ目の仕掛けは、科学的合理性と常識（日常）的合理性の区別である。この区別を排他的なものとして定式し、自らを科学の側に置くことができれば、方法論的基礎づけが成し遂げられるからである。この排他的区別は、プロト・エスノメソドロジーとポスト分析的エスノメソドロジーにおける科学観の変遷の中心ともなるものである。比較的初期のガーフィンケルは、シュッツに依拠して、両者を排他的に区別した議論を展開していた。

たとえば、「陪審員が留意する、正しい決定の規則」において、ガーフィンケルは、日常生活において人々は、決定に先立った決定条件を精緻化することではなく、産出された事柄への正当性を割り当てることに専念する、と主張する [Garfinkel 1967c : 114]。このような特性の定式によって、日常的な探求から法律専門家の探求や科学的探求が、両立不可能に区別されかねない。

さらに「科学的、および常識的活動の合理的特性」[Garfinkel 1967f] においては、様々な合理性が14点（カテゴリー化と比較、許容範囲にある誤差、手段の探索、代替的な手段と帰結の分析、戦略、タイミングへの関心、予期可能性、手続き上の規則、選択、選択の根拠／目的－手段連関の形式論理学の原理との両立可能性、意味上の明晰性と識別性、それじたいを目的とした明晰性と識別性、状況の定義の科学的知識との両立可能性）にわたって指摘され、そのうち後ろの4点が科学的合理性として区別される<sup>(2)</sup>。ガーフィンケルは、この区別につづいて、シュッツに直接言及しながら、日常生活の態度と科学的理論化の態度を対照させて、「文字通りの数学的な意味において、出来事の論理的に両立不可能なセットがこの二つの態度によって生み出されるのである」[ibid. : 276] と主張する。

しかしながら、科学知識の社会学 [Bloor 1976] [Barnes & Shapin 1979] や実験室研究 [Latour & Woolgar 1979] [Lynch 1985] [Knorr-Cetina 1981] などの科学の社会的研究の発展に応じるかのように、ガーフィンケルとエスノメソドロジーは、先に取り上げたような伝統的な科学観を破棄し、それとは非対称的に異なる科学観を証拠づけていくような経験的研究を繰り返していく。

たとえば、ガーフィンケルらは自然科学と「ブリコラージュ (bricolage expertise) の分離不可能性」について論じ、自然科学者を、明確な手段－目的関係に従って企図された行為を行うとされるエンジニアとしてではなく、試行錯誤を繰り返しながら手持ちの手段でその場をやりくりするブリコールル（「何でも屋」）として捉えるよう、C. レヴィーストロースの議論 [Levi-Strauss 1966=1976 : 22-41] を逆転させている [Garfinkel, Lynch, Livingston 1981 : 133] [Derrida 1967]。こうした主張は、諸科学は統一的方法から成るのではなく異種混成的であり、科学的方法は局所的組織化の次元においてこそ捉えられるということを含意していると言える。また、ガーフィンケルら [Lynch, Livingston, Garfinkel 1983 : 210-212] はインストラクションだけでは再現実験などの一連の行為を遂行できないという例について述べているが、これは、科学活動についての認知的アカウント、そして、それから導き出される科学者像——頭の中に埋め込まれたはずの科学的な命題や前提を駆使して、そしてそれらを反省的に思考しながら、明晰で厳密に正確な活動を展開していく者——が不十分なものでしかないことを示唆している。こうした主張から、伝統的な科学観に基づいた主張を展開していた頃のガーフィンケルとのかかなりの隔たりを見てとることができる<sup>(3)</sup>。

つづいて、学問（的分析）を社会的行為から切り離す2つ目の仕掛けは、相互行為を扱う際に行為者に付与される認知主義的前提である。リンチが述べるように、初期のエスノメソドロジーにおける研究には、A. シュッツ経由で取り入れられたF. カウフマンの科学知識および科学方法論の観念が下敷きにさ

れている。それは科学というものを、ヒエラルヒーをもって組織化された命題群、すなわちコーパスと、コーパスへの各命題の出し入れを司る手続き的規則とから成るものとみなすものであった。そして、シュッツは、ここからさらに進んで、日常生活世界の知識もそれと同型性をもつものと捉える。つまり、「手持ちの知識」とその適用にかんする認知的規範によって、日常生活世界は構成されるものとされる [Lynch 1993=2012 : 161-164]。こうした比喻では、科学的命題および科学的理論を認知的規範により形式的に操作する科学者像に類似した日常生活者像が描かれかねない。

こうした把握の最大の問題点は、ゲームであれ、あいさつのやりとりであれ、実践の多様な秩序を一まとまりの基礎——手持ちの知識とその適用上の認知的規範——へと還元してしまうことである。つまり、「信頼」や「背後期待」等々を相互行為の条件として強調し、その作動ばかりに着目して相互行為をみていくならば、予言から理論物理学に至るまでの様々な実践的行為・実践的推論それじたいの秩序を探究していこうという『エスノメソドロジー研究』冒頭でなされた方向性はとられなくなってしまう。こうした方針では、「何が彼らを陪審員にしているのか」[Garfinkel 1974=1987 : 12] という問いに答えが出されることはない。

そして、この問題点は、会話明確化実験と呼べるものの取扱が変遷していく中で克服されていくと私は考える。その実験における課題は、「用紙の左側に、当事者たちの実際の発話を、いっぽう右側に、当事者とその相手が語っていたと両者が理解している内容を書かせる」[Garfinkel 1964=1967b : 38=1989 : 37] というものである。しかも、この対話は「ある学生 [は彼] 自らと妻の間でなされた次のような対話」[ibid.] とされており、したがって、この課題は対話じたいと会話者本人それぞれによる事後的な対話報告から成るということになる。

ここで問題となるのは、この実験の結果の1つとしてなされた「行為の過程

と所産はいずれも、両当事者による——それぞれ自分のため同様、相手のために行われる——こうした会話展開の内部からしか知ることができない」[ibid. : 40=1989 : 40] という主張に含意されている強い意味での当事者主義である。この当事者主義、すなわち、結局は、会話の本当の意味なるものは発話者本人にしかわからないとする考えに存する誤謬を2つ指摘できる。

第1に、ここでは、会話という相互行為は発話者本人以外には分析不可能になり、あらゆる観察者による分析が締め出されることになる。さらには、我々の日常的な営為である、テレビ視聴や映画観賞や立ち聞きの中に含まれる会話の理解は、会話当事者たちの理解とは異なる可能性を持つがゆえに、その意義で保証されないものとなる。第2に、こうした例証は、意味内容の確定作業こそが理解であるとした点で、つねに解釈作業が伴う過程として会話の理解を提示してしまっている。

しかし、ガーフィンケルは、その後の2つの論文 [Garfinkel 1967a] [Garfinkel & Sacks 1970] において、この同じ実験を用いながらも、先の当事者主義を徐々に撤廃していく<sup>(4)</sup>。変更点は2つある。1つは、この課題の設定の変更である。『ストラクチャー』論文においては、この課題において「学生は、日常会話の当事者の話を盗み聞いて、当事者が言ったことを書き、つぎにその当事者が実際に語った内容をそのわきに書くよう求められた」[Garfinkel & Sacks 1970 : 354] ことになる。つまり、この時点で、会話の当事者と、その当事者の発話を聞いてその意味内容を書くように求められた学生が区別される。

もう1つは、この課題の結果の変更である。後の2つの論文では、発話の意味内容を右側に書くという作業が終わりなく続いたとされる。この報告の左側の欄と右側の欄の対応関係を根拠づけようとすればするだけ、学生は右側の内容を増やし続けねばならないことになったとされる。このようにして、この実験は、発話とその意味内容を記号と指示対象の関係から捉えていくことへの批判（およびその奇妙さ）として用いられていく。つまり、左側の欄にある会話

の発話それじたいが意味することは、右側に書かれた内容を完全なものにすることによって獲得できる、という考えを批判するために用いられていく。さらには、それほど一貫しているわけではないものの、当事者（さらには学生）とは区別されるものとして、「会話者」や「人」という概念を用いて会話の方法について述べていく [Garfinkel 1967a:29-30]。こうした暫時の変遷の末に、ガーフィンケルは、「自然言語の習熟」としての「成員 (member)」という考え [Garfinkel & Sacks 1970 : 342] に至り、その考えが会話分析の技法へとつながっていったとみなすことができる [中村 2014 : chap.1]。

## 2 エスノメソドロロジーと分析的エスノメソドロロジー

以上、プロト・エスノメソドロロジーの2つの問題点とその克服をみていくことによって、プロト・エスノメソドロロジーとポスト分析的エスノメソドロロジーという区分の根拠、と同時にその有効性を手短かに示してきた。さて、本論文では、このリンチによる分類を——この点ではリンチの意図に反して——さらに有効なものとするために拡張させて、会話分析こそが（否定的含意を除去された）分析的エスノメソドロロジーであり、プロト・エスノメソドロロジーを超えた存在であること——また結果として、ガーフィンケルやL.ウィーダーらによって初期に行われた、主としてフィールドワークによるエスノグラフィー的研究が（何ら修飾語句のつかない）エスノメソドロロジーとなること——ならびに、会話分析の卓越した分析性をおさえつつ、会話内相互行為とは異なる次元の実践活動の領域にエスノメソドロロジーを展開していく方向性としてポスト分析的エスノメソドロロジーを捉えることができるという見取りを示していきたい。

なお、リンチは、プロト・エスノメソドロロジーにたいしてとは異なり、分析的エスノメソドロロジーの例は挙げておらず、リンチにとっては、この分類を構

成する項は2つだけなのかもしれない。本論文において、会話分析が（否定的含意を除去された）分析的エスノメソドロジーであると主張する理由は大きくわけて2つある。

1つは、ガーフィンケルが比較的初期に行った研究と比べれば、会話分析の方法の分析的卓越性は明らかだからである。たとえば、一物一価の規則の内面化（パーソンズ）への批判のために行われた、定価のある商品を値切らせる「実験」[Garfinkel 1967b] や、社会学のコーディングの結果としてもたらされたカルテの「不十分さ」への批判として展開された、カルテの様々な「十分な」理由の記述 [Garfinkel 1967d] など、従来の社会学への批判として行なわれた研究を考えてみよう。これらの研究は、たしかに、批判ならびに新たな研究の方向性の推奨としては極めて重要な意義をもつ。

しかしながら、買い物での値切りであれ、カルテを書くこと／読むことであれ、明快な場面におけるその実践の詳細な例証という形では分析は施されていない。前者の「実験」は、実験者の実験後の「感想」や聞きとりというデータにしか基づいていない。後者では、不十分なカルテの十分な理由として医療活動の法的正統性の確保、コスト上の問題、評価や指導のための利用可能性に応じた詳細を回避する戦略、調査関心からの基準と、医療サービスへの関心との矛盾などが挙げられていくが、これらはおそらくは——というのも、「一年間の〔調査〕経験の後」[ibid.: 187] とあるだけで、調査方法についての記述はとくにない——フィールドワークや聞き取り調査などによって得られた知見だろう。しかし、これらだけでは、医療面接などの当の医療活動の只中においてカルテがどのように読まれ、書かれ、使われるのかが十分に解明されたとは言えない。これらが、まさに一連の行為それじたいとして分析の俎上にあがるには、会話分析などの相互行為分析の技法をも駆使するヒースとラフの研究 [Heath & Luff 2000 : chap.2] を待たねばならなかったと言えるだろう。

ヒース&ラフの研究は、〈患者の訴え〉〈診断〉〈処置〉は、とくに明示され



ていないのに、カルテの中で書かれる場所や順番が決まっていること、それゆえ、例えば〈診断〉の箇所に書き込みがなければ、記入漏れではなく正確な判断の据え置きなのだといったことを、時には〈欄外の示唆〉の助けなども借りながら理解していること、さらに、再診の際には、読み手の知識をあてして、不要な繰り返しなどは避けられていること、そして、このようにして各医療面接の記録を連ねていくことで、患者の全般的印象や病気の進行状態が理解できるようにもなっていることを見いだした。これら、「不十分な」カルテが十分なかたちで読み書きされている有り様や、その医者―患者の相互行為における使用の有り様を、ヒース&ラフは実際のカルテの表象やトランスクリプトをとおして具体的に一つ一つ例証していった。こうした研究方法ならびに知見こそ分析的であると称するに値するだろう。

もちろん、実際の行為や相互行為それじたいの分析には、録音、録画技術の飛躍的向上も待たねばならず、1960年代のガーフィンケルの研究はこの時代的制約を受けてはいる。けれども、サックスがほぼ同時期に会話分析を発展させたことをふまえば、実践の詳細の分析への方向性が当時のガーフィンケルにあっては弱かったと言えるだろう。つまり、エスノメソドロジーの代表的研究のいくつかとされるガーフィンケルの論文は、実践的行為や実践的推論じたいに目を向けていくという、新しい探究現象の開拓やその独創的な着眼という点で極めて重要であるけれども、その現象の分析方法にあっては、従来の調査方法しか用いられていなかった。これでは、新たに開拓された現象である実践活動それじたいの組織化を捉えるには不十分であった。なお、広範なフィールドワークに基づく第一世代のエスノグラフィー的研究、たとえば、L. ウィーダーによる中間収容施設の研究〔Wieder 1974〕やビットナーの警察研究〔Bittner 1967〕も、この分類項（「エスノメソドロジー」）の中に入れることができるだろう。

以上の意義で、ガーフィンケルの『エスノメソドロジー研究』や第一世代の

エスノグラフィー的研究はそれほど分析的ではないと言える。そして、この点にかんして、会話分析が方法として発展させた技術がもたらした、一連の実践的行為の一つ一つを検討可能とする分析的性質は明らかであり、その卓越性はいまや歴然たる事実である。相互行為的組織化のトランスクリプトをとおしたデモンストレーション、行為連鎖という観点からの分析的知見、発話だけでなく、実践上レリヴァントとなる様々な振る舞いの細部（イントネーション、ピッチ、強勢、ジェスチャー、視線）をも対象におさめていくやり方を考えてみよう。これらのやり方においては、実践活動が録画、録音され、その電子データとしてそのトランスクリプトが作成され、そのうえで一つ一つの行為が連なるあり様が分析されていく。こうした方法の技術的洗練化によって、実践活動の組織化は分析可能となったのである。これは会話という実際の実践を、それについての報告や聞き取りではなく、それじたいにおいて解明するものである点で、優れて分析的であると言える。

会話分析を分析的エスノメソドロロジーであるとする2つ目の理由は、ポスト分析的エスノメソドロロジーの提唱者であるリンチじしんによる会話分析への評価に関わるものである。リンチは、その著『科学実践と日常的行為（邦題：エスノメソドロロジーと科学実践の社会学）』において、会話分析という調査プログラムの展開について章を割いて論じ、物質的技術（録音、録画技術による会話データの保存、再生）、文字表現の技術（詳細な転記技術）、社会的技術（共通の専門課題や専門用語の確立など）を作り上げることによって、会話分析が一つの分析的文化をもたらしたと述べている [Lynch 1993 : chap.6]。いっぽうで、エスノメソドロロジーの「古典的」論点が会話分析の成功のゆえに廃れてしまったことに言及し、思想史に由来する古典的なテーマ——「認識トピック (epistopics)」：観察、表象、測定など——を再特定化していくことこそが、古典の解釈に埋没することなく（科学的ワークの）エスノメソドロロジー研究、つまりはポスト分析的エスノメソドロロジーを前進させていく道であると説き、

その次の章においてその素描を示している。「エスノメソドロギーとの歴史的近さを考えれば、会話分析研究の蓄積を無視する理由はないのである。むしろ、重要なのは、それで何ができるか、である」[Lynch 1993=2012:297]という言葉に象徴されているように、この議論展開からすれば、ポスト分析的エスノメソドロギーとは、分析的エスノメソドロギーたる会話分析の展開をふまえて、会話実践とは異なる実践領域を探究するエスノメソドロギーを目指すものだとと言えるだろう。

もちろん、こうした見取りには問題もある。会話分析の方法的基礎の問題を焦点化した際、会話分析が、隣接対や順番取得組織といった分析のカテゴリーを導入したことで、研究対象を作りあげている直観的能力と専門的な分析能力に区別をもたらし、今一度プロト・エスノメソドロギー的態度に陥っているとリンチは批判しており [Lynch 1993=2012: chap.6]、先に引用した箇所もそれをほのめかすように、会話分析とエスノメソドロギーが全くの別ものであるかのように表現されている。リンチにとって、分析的であるとは、実践活動の組織化をその実践を理解する者ならば誰にでも理解できるように例証することから離れて、専門的記述による科学的対象にするという含意が込められているのだろう。実際、この点は、「分析 (analysis)」という語を「解明 (explication)」と対比させながら論じられてもいる [Lynch 2000: 527-528]。

本論文では、この主張を、会話分析の本質的特性にたいする根本的な批判ではなく、会話分析にたいする重要な警鐘とみなしておきたい。分析のカテゴリーを提出することが直ちに、直観的能力と専門的な分析能力の区別と分離をもたらすわけではない。隣接対について考えてみればよくわかることだが、分析のカテゴリーは、西阪が言うように、日常概念の要約的表現であり、可謬性も備えるものとして提出されているとみなすことも可能である。そして、その誤謬の如何は再び、個々の事例において問われるものである [西阪 2012]。リンチじしん、単一事例を検討したシエグロフの論文を挙げて、優れた会話分析研究

として、懸念を示しつつもそれなりに評価している [Lynch 1993=2012 : 423] し、後にガーフィンケルも、この論文を挙げている [Garfinkel 1996 : 8]。よって、リンチの主張を、西阪が言うように捉えておくのなら、さしあたり問題はなくなるとしよう。

以上より、エスノメソドロジーの新たな分類がもたらされる。それによって論文単位の区分けをすれば、初期ガーフィンケルのいくつかの研究 [Garfinkel 1963] [Garfinkel 1967c] [Garfinkel 1967e] などがプロト・エスノメソドロジーとなり、「不十分なカルテの十分な理由」 [Garfinkel 1967d] やウィーダーやビットナーのものなど、主にフィールドワークによる第一世代のエスノグラフィ的研究のいくつかがエスノメソドロジーとなり、会話分析が（否定的含意が除去された意味での）分析的エスノメソドロジーとなり、その先にある、「研究されている実践的行為の領域の外側に理解可能な理論的立場」 [Lynch 1993=2012 : 178] がないという態度で臨まれる、会話実践とは異なる実践の探究がポスト分析的エスノメソドロジーとなる。

この分類は、たんに、ある程度の整合性があるだけでなく、またポスト分析的エスノメソドロジーにとって有益であるばかりでもなく、分析的エスノメソドロジーとして会話分析を捉えることによって、エスノメソドロジーの発展に幅を持たせることになる点でも有意義なものであると言えるだろう。ガーフィンケルは、晩年、エスノメソドロジー研究の知見のまとまりをカタログと名づけ、そのいっぽうで、その他の学問（形式的分析）の体系化された知見群をコーパスと呼んで対比的に論じている。

疑いなくコーパスの地位を占める形式的分析の研究知見にたいして、形式的分析がこれまで提供し、今後も提供しうるもの以上の何があるのか。この「それ以上の何か (What more)」をエスノメソドロジーは提起し、努めて理解していくのである [Garfinkel 1996 : 6]。

つづけて、カタログの項目を増やし続け、その名の下にある経験的研究を繰り広げることが説かれる。もちろん、ポスト分析的エスノメソドロギーにおける認識トピックの研究知見も、このカタログの項目に収まる。そして、こうした研究を推し進めるにあたって、相互行為におけるトーク (talk in interaction) という研究領域を除外するどんな理由もない。会話分析が蓄積してきた知見の豊かさを考慮するならば、なおさらであるだろう<sup>(5)</sup>。

### 3 分析的エスノメソドロギーのハイブリッド

さて、本章では、分析的エスノメソドロギーたる会話分析と (ポスト分析的) エスノメソドロギーの関係の一端について、さらに議論を掘り下げていきたい。まずは、会話分析の創始者たる H. サックスが見いだしたメンバーシップ・カテゴリー化装置 (MCD) というアイデアを確認し、つづいて E. シェグロフが課した会話分析の2つの制約について考察し、「手続き上の帰結」という制約が、MCD を事実上拒否していることを確認しよう。

#### (1) メンバーシップ・カテゴリー化装置 (MCD)

H. サックスにより提出された MCD という装置は、社会学者以前にすでに成員自身が行っている活動としてカテゴリー化を捉え、そしてこのことの重要性を示すために提出されたものであった [Sacks 1972b]。この、成員の活動の方法を解明するという方向性は、すぐれてエスノメソドロギー的である。そのいっぽうで、この装置は、社会学者が会話データを取り扱っていくための道具立ての1つとしても提出されたのであった。社会学者による分析手法を指し示すものとしても、この道具は意義あるものとして提出されている。

では、MCD の内実を最低限確認しておきたい。それは、1つの集合と適用規則から成る。たとえば、〈赤ちゃん〉や〈母親〉はすくなくとも〈家族〉と

いう集合内のカテゴリーである。これらは1つの集合内の要素カテゴリーでありうる。カテゴリーを使用していく観点からすれば、あるカテゴリーを使うことは、同時に、そのカテゴリーが含まれる何らかの集合を用いている、ということになる。

そして、この集合の適用規則は2つ、さらにそのうちの1つの系に属する複数の格率がある。その1つである経済規則は、指示十分規則とも言い換えられているように、あるカテゴリーが用いられている場合、それだけでその人物を指示するのに十分なものとなる、というものである。そして、一貫性規則とは、ある集合内のカテゴリーが用いられたのなら、つづけて表現される人物は同じ集合内の何らかのカテゴリーであってよい、というものである。この規則はレリヴァンス規則（の1つ）と言い換えられている点からわかるように、記述を連ねたり、行為を接続させていくことにかんして意義が少なくないものである。

また、カテゴリーには、それに結びつく活動がある。それは〈カテゴリーに結びつく活動〉と名づけられている。重要なのは、この結びつきが規範的なものだということである。たとえば、小さな子供がまるで泣かないのであれば、そのことは欠如として認識可能であり、かつ、時には褒められることの根拠となる。こうしたことが可能になるのは、〈小さな子供〉と〈泣く〉という活動が規範的に結びついているからである。

そして、レリヴァンス規則の系に属するものとして、いくつかの格率がある。たとえば、見る者の格率とは「あるカテゴリーに結びついた活動がなされており、しかも、その活動が結びついているカテゴリーのメンバーによってその活動がなされているのを見るのなら、そのように見よ」[Sacks 1992 I : 259] ([Sacks 1972b : 225] も参照のこと) というものである。この格率は行為者の同定にたいして、カテゴリーに結びついた活動がもつレリヴァンスを定式したものと言える<sup>(6)</sup>。

なお、こうした特質をもつ装置である MCD は概念的知見であると言えるだ

ろう。たとえば、〈家族〉という MCD 内のカテゴリーに〈父親〉と〈母親〉と〈子供〉が含まれることは、公式統計やインタビューをとおした経験の一般化によって確定されるのではない。また、日本語でも、〈父親〉がいない〈家族〉を〈母子家庭〉とわざわざ有徴化して把握してきた。〈家族〉という MCD 内のカテゴリー要素は、〈母子家庭〉数の増加などといった経験的事実に直面することがあるとしても、それだけでは変更の必然性にはさらされない。むしろ、そうした家庭を〈母子家庭〉という概念の下に有徴化して把握するだけならば、〈父親〉〈母親〉〈子供〉が通常は〈家族〉という MCD を構成するカテゴリーであることはかえって強まると言えるだろう。

## (2) 「手続き上の帰結」と MCD

さて、サックス亡きあと、共同研究者であった E. シェグロフらによって大きな研究プログラムとなった会話分析においては、上記で説明した MCD を使うことは積極的に拒否されたと言える。それは何ゆえに拒否されたのか。このことを確認していきたい。

まず、会話分析の実施にあたってシェグロフの課した2つの制約について確認しよう。それらは「レリヴァンスの問題」と「手続き上の帰結の問題」というものである。「レリヴァンスの問題」とは、そもそもサックスが論じたものであるが、社会学者が社会活動を記述する際に用いる社会成員やコンテキスト・場面の特徴づけは、正しさの基準だけからすれば複数存在する以上、その中から一つを選ばなければならないという問題である。そして、その解決のためには、その特徴づけが「参与者にとって例証可能にレリヴァントであるような、起きていることの側面に基づいている」[Schegloff 1991 : 50] ことが必要となる。

つづいて「手続き上の帰結の問題」とは、「レリヴァンスの問題」を、相互行為分析の次元において強めたものと言ってよい。シェグロフによれば、「レ



リヴェンスの問題」が解決されて根拠づけられた、社会成員やコンテキスト・場面の特徴づけは、それだけでは相互行為の分析に用いるには不十分であり、たとえば「定式されたコンテキストと、トークで実際に起きていることを直接『手続き上』関係づけ」なければならない。つまり、そうした関係の帰結として、相互行為における具体的な詳細が、相互行為が進められていく際の一つの手続きとして存在しなければならない、ということになる [Schegloff 1991 : 52-57]。

さて、MCD の事実上の拒否であるが、これは、シュエグロフによる、制度的場面の会話分析にたいする批判論文によって表明された。D. ジンマーマンらによって制度的場面として分析された警察への緊急電話においては、警察への出動〈要請〉とそれにたいする応答（すなわち、〈受諾〉あるいは〈拒絶〉）という隣接対の間に、警察による〈質問〉とそれにたいする要請者の〈答え〉という隣接対がいくつも挿入されることが多く見られた。つまり、会話分析の用語ならば、〈要請—受諾／拒絶〉の隣接対の間に〈（要請の受け手の）質問—（要請者の）答え〉の隣接対の挿入が長く続けられるという特徴をもったやりとりが数多く見られたのである。

そして、ジンマーマンは、この発話の連鎖上の特徴を、諸制度機関や組織を反映したものとみなした [Zimmerman 1984 : 220]。それにたいしてシュエグロフは、いわゆる日常的な電話のやりとりにおいて〈要請〉が要件となっているものを取りあげ、そこでも同じ行為の担い手によって同じ形で挿入連鎖が置かれていることを指摘し、ジンマーマンらの分析の主張を批判した。

この批判は以下のように理解できるだろう。〈要請の受け手〉による〈質問〉によって構成される〈長い挿入連鎖〉という詳細は、他の場面、とくに日常的なやりとりと言える場面においても用いられている。そして、それゆえに、ジンマーマンらの分析は、手続き上の帰結という制約を満たしていない、と [Schegloff 1991 : 57-60] <sup>(7)</sup>。この批判からすれば、手続き上の帰結とはたんに〈制度〉や〈警察〉を特徴づけるような相互行為上の詳細であるだけでなく、



他の場面にたいして排他的であるような詳細でなければならない、と言い換えられる、とさしあたりは解釈できるだろう。

この手続き上の帰結の問題という制約を課すことで、シェグロフがMCDの使用に制限を加えていることは明らかだ。たんに事実に基づいているだけならもちろんのこと、たとえレリヴァンスの問題を解決していても、それだけでは参加者を、たとえば〈警察関係者〉とカテゴリー化することは避けられるべきだという主張が展開されているのである。

もちろん、会話内相互行為の組織化のみに関心があるシェグロフがこうした制約を課すのには十分な理由がある。とりわけ重要なのは、MCDのような知見の利用がシーケンスの組織化の観点からは注目すべき点を見えにくくしてしまうことである。シェグロフの挙げている例が明快である。〈割り込み〉が〈男性〉によって多くなされるという統計的事実から〈割り込み〉という相互行為内現象を説明する研究がかつて行われた [Zimmerman and West 1975]。この説明は、まず、「レリヴァンスの問題」を解いていない。その当の場面において、ある参加者が他ならぬ〈男性〉と〈女性〉であることが成員の志向の中に織り込まれているかどうかを検討されていないのである。

さらに、シェグロフの批判はこの点に止まらない。相互行為において〈割り込み〉が生じているということはどういうことなのか、このことじたいがシェグロフにとっては問うべき課題だからである。この課題は単純ではない。そのためには、〈同時発話〉と〈割り込み〉との関係が示されなければならず、さらにそのためには、〈同時発話〉という相互行為現象が分析的に解明されていなければならない。つまり、第二の批判は、〈性別〉のようなMCDを用いて分析していくならば、「〈一時に一人の人が話さなければならない〉という規則を持つ会話内相互行為において、〈同時発話〉という問題的事態を会話参加者がいかに処理していくのか、そのメカニズムを追究していく方向性が隠されてしまう」 [Schegloff 1987=1998 : 151-153] ということである。

このシェグロフの第二の批判の射程圏内には、たんに「レリヴァンスの問題」すら未解決にした研究だけでなく、MCD を用いて相互行為を分析していく方向性全てが入ることに注意しておきたい。同様の指摘がジンマーマンらの制度的場面の研究にたいしてもなされている。つまり、〈要請〉を受けて〈質問〉を行うのは〈警察〉だからだとだけ説明してしまうことは、〈要請—受諾／拒絶〉というシーケンス・タイプにおいては〈質問—答え〉というタイプが挿入されやすい、という隣接対のタイプどうしの一般的連関や、挿入連鎖の入らない〈複数の順番構成ユニットによる要請—受諾／拒絶〉という代替的タイプの存在ならびに解明が見失われる可能性がある、ということになる [Schegloff 1991 : 59, 63]。たしかに、相互行為の詳細をあくまでシーケンスの組織化の観点だけから分析的に解明しようという研究プログラムからすれば、MCD によりもたらされる説明が阻害的に働く可能性は否めない。こうした理由で、シェグロフは「手続き上の帰結の問題」を設けたと言っても過言ではないだろう。

### (3) 方法の固有な妥当性要件：成員（自然言語の習熟）の記述の観察・報告可能性

以上、「手続き上の帰結の問題」は MCD を分析装置として用いていくことを事実上拒否したものだと理解できることをみてきた。さらに、こうした主張は、会話分析というプログラムを発展させていく点から考えて十分に根拠あるものであったことも確認した。しかし、この「手続き上の帰結の問題」は、その帰結の性質にかんしては検討の余地があり、さらには成員の実践の記述という観点からすれば制約としては受け入れられないと私は考える。以下では、この成員の実践の記述を解明することを目指すプログラムから、この「手続き上の帰結の問題」にどう向かい合うべきか考えていきたい。

まず、およそ諸々の場面において、シーケンスの組織化の特徴は、家族的に類似せざるをえないように思われる。もちろん、排他的特徴が場面ごとに残

されている可能性を否定しつくすことはできない。それは経験的な問題である。実際、シェグロフは、「クラスルーム」と「大統領記者会見」を例にして、とくに順番取得組織の観点から、こうした排他的な結合関係が存在する場合について簡単に分析を施している [Schegloff 1987=1998 : 161-172]。シェグロフが設けた制約に従うのなら、そうした排他的特徴によってはおじめて、諸々の場面に則した人物カテゴリーが使えるようになると解釈できる。そして、もし排他的特徴をもたせない相互行為ならば、どのような分析がなされるべきなのか。それは、全ての参加者を〈話し手〉と〈聞き手〉、あるいは〈電話のかけ手〉〈電話の受け手〉などといった、証明が比較的容易なものを割り当てて、順番取得組織の観点を中心にして当該の相互行為を記述し分析することになる [Schegloff 1987=1998 : 159-160]。

しかしながら、そうした記述は、常識的概念を用いて産出、理解される成員の記述という観点からすれば、少なからず奇妙であるように思われる。なぜなら、そうした記述は概ねつねにレリヴァントな成員の実践の記述であるように思われないからだ。つまり、実践者であれ観察者であれ、我々が、日常言語の使い手として、相互行為の詳細における特徴——これから論じていくように、その特徴は、つまるところ排他的であってもなくても構わない——の有無に関わらず、それぞれの場面に適切な人物カテゴリーを使用して、その場面の振る舞いを産出し、理解しているというまぎれもない現実には、「手続き上の帰結の問題」が課す制約はそぐわないのである。むしろ、諸々の場面をまさにその場面として、そしてそのことと相即的に、その場面の参加者をしかるべきカテゴリーの下に我々が理解していること、そしてそうした理解に基づいて振るまいを織り成していること、しかも、そのように観察・報告できること、この事態はいかにして解明できるのか。かの制約に従うのなら、こうした探究はしばしば阻害されてしまう。よって、こうした方向性——自然言語の習熟としての成員の記述を解明していく方向性——での探究を志すのであれば、「手続き上の

帰結の問題」は、もしも制約として課されるのなら、重すぎるあまり阻害的なものになる。シュエグロフ自身、手続き上の制約を中心とするこうした制約を「強要するにはかなりの重荷」[Schegloff 1991: 66] であるとしているが、それでも新たな知見産出のためには満たされなければならないものだろうとしている。しかし、本稿が目指すような、まずをもって成員の記述の解明を志すプログラムにとっては、「手続き上の帰結」を制約としてではなく、選ぶう分析課題のうちの1つとして位置づけるべきではないだろうか。本節で主張したいのはこのことである。

そして、この主張は、ガーフィンケルによる「方法に対する固有な妥当性要件 (unique adequacy requirements of methods)」[Garfinkel & Wieder 1991: 182-184] にそったものであると考える。この要件は、弱く捉えるならば、分析者は探究現象の局所的産出とそれに伴ったその現象の自然な理解可能性 (natural accountability) を普通に備えて (vulgarly competent) いなければならない、ということである。強く捉えるならば、探究現象についての知見は、その現象の産出にとってインストラクションとして利用できなければならない、というものである。そして、ガーフィンケルは、これに関連して「秩序\*現象は、その現象の生きられた局所的産出と自然な理解可能性から成るものとして、それを [観察すること], [認識すること], [数えること], [収集すること], [トピックにすること], あるいは [記述すること] のどれであれ、それが焦点化されているのなら、それらの方法が方法として何であれ、その方法をすでに持っている」[Garfinkel & Wieder 1991: 182] と説明している<sup>(8)</sup>。

この強い意味でこの要件を正確に捉えるのは難しい。さしあたりは、以下のように解釈しておきたい。どのような探究方法が適切であるのかは探究現象によってすでに定まっているに等しく、それを発見できなければならない、と。つまり、原則としては、エスノメソドロジーにはそれ固有の方法はなく、探究現象に固有な探究方法があることになる。もちろん、新たな方法をつねに作ら

ねばならないということではないだろう。対象と方法の不可分性を認識したうえで、「シルズの不満」[Garfinkel, Lynch, Livingston 1981:133]を受けることのない妥当な方法が見いだされるべきであり、その妥当性は、最終的には、インストラクションとしての有効性によって判断されるべきだということであろう。なお、「シルズの不満」とは、研究対象に外在的な方法を行使してしまうことによって、研究対象の特性が捉えられない事態への不満のことである。ガーフィンケルも参加した陪審審議の研究プロジェクトにおいて、ペイルズの相互行為過程の分析方法の採用が提案された際にエドワード・シルズが述べた言葉「ペイルズの相互行為過程を用いれば、陪審審議の何が陪審員を小集団にしているのかわかるだろう。しかしながら、我々が知りたいのは、陪審審議の何が陪審員を陪審員にしているのかだ。」[Garfinkel, Lynch, Livingston 1981:133]に由来して、そう名づけられている。そして、この不満をガーフィンケルは真剣に受け取り、エスノメソドロジーの着想を得たのである[Garfinkel 1974=1987]<sup>(9)</sup>。

では、先に提出した探究プログラムの方向性と方法に対する固有な妥当性要件の関係を検討していきたい。諸々の場面をまさにその場面として、そしてそのことと相即的に、その場面の参加者をしかるべきカテゴリーの下に我々が認識していること、そうした認識に基づいて振るまいを織り成していること、しかもそのように観察・報告できること、これらを出発点としなければならないというのは、分析者は探究現象の局所的産出とそれに伴ったその現象の自然な理解可能性(natural accountability)を普通に備えて(vulgarly competent)いなければならない、という要請を、とくに言語をベースとした相互行為場面の探究に合わせて言い換えたものと言えるだろう。現象が自然に理解できることというのは、MCDや隣接対を含めた様々な概念の規範的連関の下に事態を観察・報告できることに他ならないからである。

そして、上記の観察・報告可能性を付与している道具立ての追究とは、強い

意味での要件——どのような探究方法が適切であるのかは探究現象によってすでに定まっているに等しく、それを発見できなければならない——への対応の1側面であると言えるだろう。たとえば、MCDのような知見は——現象産出のインストラクションにまでなれるのかは定かではないけれども——現象の理解可能性を支えるものだろう。よって、本稿が目指すプログラムからなされた問い立ては、方法にかんする固有な妥当性要件を言い換えたものの1つであると言えるだろう。

さて、ここでこの問いにどう答えるのか。それには、「レリヴァンスの問題」にたち返る必要があると私は考える。そもそもサックスが「レリヴァンスの問題」を解くべきものとして主張したのは、ある振るまいや、その振るまいの担い手を記述するのに、「複数の正しい記述」がつねにありうるからである。そして、こうした正しい記述の複数性にもかかわらず、何らかの活動がなされている場面において、我々は（多くの場合は普通）1つの記述をレリヴァントなものとしみなしているのはいかにしてなのか。このことを考察した際に、その答えを構成するものの1つとして提出されたのがMCDであった。

この点を、とくに見る者の格率と関わらせてサックスが挙げている例を取りあげて確認しておきたい。サックスは、グループセラピーのセッションにおいて、セラピストが新入りを他のクライアントに紹介した後に、クライアントの一人が新入りにかけた発話「今、俺たちは車について話している最中だったんだ」という発話を分析している[Sacks 1991 I :300-306]。そこでは、まずは（レリヴァンス規則の系に属する）見る者の格率から、〈車について話す〉という活動が〈ティーンエイジャー〉というカテゴリーに結びついているとし、つづいて一貫性規則から、新入りのクライアントにも〈ティーンエイジャー〉のカテゴリーがその担い手となるのにレリヴァントなものとして差し出されていることを論じている。そして、これら（ならびにスロットとアイテムという、シーケンスにかんするアイデア）を用いて、この発話が〈誘い〉という行為を構

成していることを明らかにしている。

まず言えるのは、このようにして見る者の格率から〈ティーンエイジャー〉というカテゴリーを導入するだけでは「手続き上の帰結」という制約を満たしているとは言えないということである。それにもかかわらず、注目すべきは、この〈誘い〉という行為の認識可能性は〈ティーンエイジャー〉というカテゴリーと見る者の格率ならびに一貫性規則によってはじめて解明できるのであり、〈会話の参与者〉という特徴づけでは十分に解明できない、ということである。ここからわかるように、MCD とは、産出された記述の理解可能性だけでなく、記述を産出していくという我々の行為の中において使われているものだと言える。つまり、MCD は、たとえ「手続き上の帰結の問題」が解決されないままとしても、ある場面における行為者や行為を——しかも、観察者、分析者に先行して行為者自らが——同定する道具立てになっているのである。よって、MCD および、それと規範的に結びつく諸行為をとおしたその利用を解明していくことは場面それじたいの解明の一部となっているのである。

「レリヴァンスの問題」が解決されれば、その記述は社会科学者の記述である以前に成員の記述として成立している。「レリヴァンスの問題」が解決されるということは、我々が日常言語の使い手として、相互行為の詳細における特徴の有無に関わらず、それぞれの場面に適切な人物カテゴリーを使用しているというまぎれもない現実を捉えていることになる。この現実には、制約として課された「手続き上の帰結の問題」はそぐわないのである。

以上より、こう主張することができだろう。MCD を分析の俎上にのせることは相互行為分析にとってもきわめて有意義であり、分析素材によっては不可欠なことであるがゆえに、「手続き上の帰結」に注意と敬意を払いつつも制約としての性質を受け入れずに MCD も用いていく方向性を、ありうべき一つの分析方針、かつ、とくに言語をベースとした相互行為場面における成員の記述の解明を主要目的とする研究プログラムからすれば、目指すべき一つの分析



方針として提案することができる、と。

もちろん、このように述べたからといって、相互行為の分析には MCD だけが必要であるということでは全くない。むしろ逆である。シェグロフのジンマーマン批判からもわかるように、相互行為の詳細において、どのような指し手が繰り広げられるのかは MCD によっては定まらない。たしかに、MCD は、相互行為が織りなされていく際、ある種の枠のようなものとして働いていると言ってよい。しかし、その都度の相互行為の状況において、どのような詳細が形となってあらわれるのか、そしてそれがどのような秩序をもたらすのか、このことは、それじたいとして取り扱われなければならない。そして、このことを分析的に記述していくためにも、会話分析によって提出されてきたシーケンスの組織化にかんする知見が不可欠である。ならば、そのような知見を産出していくには、いったんは、通常の MCD のような参与者同士の諸々の規定関係がないような、さしあたりは参与者を〈会話参与者〉とだけカテゴリー化できるような場面を対象として、順番取得組織や、そのシステム内での様々な指し手やその連鎖について考察していく必要があるだろう。これこそが会話分析という研究プログラムであるし、「手続き上の帰結の問題」という制約を課したのも、このプログラムの発展のためであるとみなせた。これから示していくように、成員の記述の解明を主要目的とする研究プログラムも、この知見に依拠する側面は大いにある。

また、後にシェグロフが論じているように、MCD という道具立てに使用上の注意点、あるいは改善点があることは間違いない [Schegloff 2007]。シェグロフは、見る者の格率において（たとえば、「(疾患により) 目から涙が出ている」のではなく「泣いている」という）行為同定じたいが問われねばならないと指摘したり [ibid. : 472]、人物カテゴリーと活動カテゴリーとの規範的結合性は、サックスがしたように、証明されなければならないと注意を促したり [ibid. : 476]、属性とカテゴリーとの区別が会話の参与者によってなされてい



ることなどから、カテゴリーという用語の外延の曖昧さにも注目している [ibid. : 480-481]。ともあれ、ここでおさえておくべきなのは、これらは MCD にまつわる原理的困難ではないということだ。シェグロフはこうした改善を行っていくにあたって2つの論点が鍵となるとしている。

- (1) 相互行為におけるトークなどの振るまいの日常的な働きは、参与者にとってカテゴリー化装置がレリヴァント、あるいは駆動するのにどのように役立っているのか？
- (2) 分析者が主張したいような、カテゴリーへの参与者の志向が作動しているということを、参与者が「女性として私は……」などと言わずに、どのように示すことができるのか？ [ibid. : 477]

本稿のこれまでの議論からすれば、この論点の(1)は、あくまで「レリヴァンスの問題」を言い換えたものであるとみなしてよいだろう。たとえば、西阪の言葉を借りるなら、〈日本人—外国人〉という「カテゴリー対の担い手間の関係にかんする一般的期待に従って一定の知識・経験を優先的に報告する権利を互いに配分し合」っていることは、そうした知識を所有権を示すかたちで主張したり、優先性を維持するかたちで確認を求めたりといった、トークがもたらす働きとしての行為をとおして明らかになっているということである [西阪 1997 : 86-87]。

論点(2)は MCD の同定にあたっては証明がなされるべきである、ということだろう。そして、その証明のあり方としては、サックスが行ったような、その逸脱例の成員自身による逸脱同定の提示もあれば、その手続き上の帰結による証明もあるだろう。重要なのは、この論文にいたって、シェグロフは、「レリヴァンスの問題」を解決する際の有効な手段として MCD があることを完全に拒否してはいない、とみなせるということである。実際、こうした方向性を

展開したシェグロフ自身の研究もある [Schegloff 2002]。

以上から、方法にかんする固有の妥当性要件にそって、とくに言語をベースとした相互行為場面における成員の実践の記述を志すのなら、「手続き上の帰結の問題」という制約が課された会話分析の研究プログラムとは相対的に独立して、シーケンスにかんするその知見と MCD というアイデア双方を同時に用いながら、事例分析を施していく研究プログラムをたてることができる。そして、その中で、MCD によってもたらされる諸々の規定関係、たとえば、参与者間の規定関係と、相互行為の詳細とが、その都度どのような結びつきにあるのかを、西阪が行ったように [西阪 1997]、問うていくことは極めて有意義であり、重要な分析課題として位置づけることができる<sup>(10)</sup>。

#### (4) 同時併用による分析的例証

さて、本節では、上記から導かれた方針——会話分析が発見してきたシーケンスの組織化の知見と初期のサックスのアイデアである MCD の双方を同時に用いて、相互行為をととして産出される当該場面の実践を解明していくという方針——にそった分析を若干ながら具体的に示しておきたい。分析の素材として、ガンの相談を専門とする機関において録音された電話会話において、助言者により助言がなされ、つづけて相談者により受諾あるいは拒絶がなされる局面を取り上げよう<sup>(11)</sup>。まずは、以下の断片を見てほしい。これは、一つの助言がなされた後のやりとりである。

【断片 1】

1 E: せん癌なんですよね=

2 R : = ああ（せん）癌かあ      あのお最初の子宮癌があ「

3 E : [ええ

4R: あっこれせん癌のあんしゅあのお 子宮けい癌だったわけね

5 E : ええ

6 R : はい＝

7 E : ＝せん癌ってえのはそのお抗癌剤効があ～かな [り

8 R : [効きにくいって

9 R : いいですけどね

10 E : ええ

11 R : でも↑ 効きづらいつて言いますけ [れども でもお やあ

12 E : [はい

13 R : やりますよ

1行目において、〈相談者〉は助言の不適切性を示唆し、7行目でその理由を明示的に述べはじめる。しかし、その際、「そのお」や「があ～」などを発言の中に組み入れる。ここに、この不適切性の言いにくさが示されている。そして、この順番に助言者は介入する。しかも、介入することによって〈助言者〉は〈相談者〉の始めた文を引きとるのだ。

注目すべきは、〈相談者〉が、同時発話を最小限にすることによって、助言者の介入にも引き取りにもサンクションを与えずに是認している点である。このことからわかるのは、「そのお」や「があ～」といった有徴を示すマーカーが用いられているのは、〈助言〉にたいしては、〈受諾〉するのではなく〈拒絶〉することが非優先的な事柄だからだというばかりではない。これは、「せんガンに抗癌剤が効きにくい」という専門的知識を語る資格の問題でもある。電話相談において、ガンの専門的知識は助言のための一つの大きなリソースであり、〈助言者〉によって優先的に語られるべき事柄である。この規範的意味でも、こうした内容を持つ発言が〈相談者〉によってなされることは非優先的なのである。

このような非優先性がお互いに気にかけているからこそ、〈相談者〉は

言い淀むのであり、〈助言者〉は介入して相談者の文を引きとるのであり、つづけて〈相談者〉はその引き取りを是認して自らの発言をやめるのである。したがって、このようにして〈助言者—相談者〉というカテゴリー対は、この場においてレリヴァントな成員カテゴリー化装置として働いている。この装置の下にあるカテゴリーが規範的に志向されている。この規範的志向こそが、この場がまさに電話相談の場として存立することを可能ならしめているのである。

つぎに、〈助言者—相談者〉を他のカテゴリーの担い手ともする振るまいを取り上げよう。以下の断片を見てほしい。

【断片2】

- 1 E：そでしたらね、5年（1.0）経ったら入れるんですか〔5年  
2 R：〔いや入れ  
3 R：ません  
4 E：あもずっと入れ〔ない  
5 R：〔いっぺんな、ゼロ期でもなんでもいっぺんガン  
6 R：になったら保険は入れない  
7 E：あ保〔険  
8 R：〔ガン保険は入れん普通の保険は入れますよ  
9 E：あ～＝  
10 R：＝あたしだってガンの手術してから2年目に、簡易保険入ったも  
11 R：ん  
12 E：（1.4）えっ何の保険です〔（か）  
13 R：〔簡易保険＝  
14 E：＝簡易保け〔ん  
15 R：〔普通の生命保険ね  
16 E：はあい

この断片は、一度ガンの宣告を受けたものはガン保険には入れないということとめぐるものである。注目したいのは、「あたしだってガンの手術してから2年目に、簡易保険入ったもん」という発言である。〈助言者〉は、これによって、自らも〈ガン経験者〉であったことを告げている。では、ここで、〈ガン経験者〉を一つのカテゴリーとして持つカテゴリー集合の中で、〈相談者〉が担えるカテゴリーとは何か。それは、同じく、〈ガン経験者〉に他ならない。共成員性を持ちうるカテゴリーとは、場面の参与者をそのカテゴリー集合の同じ一部として含むカテゴリー化装置内のカテゴリーである。直観的には、こうしたカテゴリーへの言及は、他のカテゴリーに比べて、しばしば、その装置が何らかの形で働く機会を提供するように思われる。つまり、ここで〈助言者〉と〈相談者〉は、あくまで助言の説得作業の枠内ではあるが〈ガン経験者—ガン経験者〉というカテゴリー集合の担い手ともなっているように思える。

さらに、この主張は、自分の〈経験〉として呈示されている。サックスが論じているように、〈知識〉を語る資格はその主張者に限らないいっぽうで、〈経験〉を語る資格は経験者しか持ちえない [Sacks 1992 : ii 246]。よって、この自己呈示は、経験者しか持ちえないことに双方がそれぞれ達したことになる、お互いの共成員性が高まる可能性を持つ。

しかし、経験の共有による共成員性の強化は、それだけでは、〈助言者—相談者〉という成員カテゴリー化装置と折り合いが悪い。〈経験〉によって共成員性が確保されるのなら、同種の経験的内容にかんして、共成員が語る資格はさしあたり同等になるはずだからである。共成員性を持つこの対称性は、例えば〈看護師—患者（の親近者）〉といったカテゴリー対とは対照的に、そのままでは〈助言者—相談者〉というカテゴリー化装置を持つ非対称性と齟齬をきたしてしまう。もしも、助言する資格が双方に全く平等に分け与えられてしまうのなら、〈助言者〉という資格を持つ優位性はなくなってしまうのである。よって、一見したところ、助言していく中で共成員性を持つカテゴリーに言及

するのなら、助言を差し出す条件が不十分なものとなってしまうかねないように思われる。

しかし、実際には、そのようにはなっていない。「簡易保険」についてのやりとりの後、〈助言者〉は「だあ、保険、ガン保険諦めて、でもおあの、元気になったらまた簡易保険でも入ったらよろしい」と直接的な助言を繰り返出し、〈相談者〉は「はい、わかりました」と受諾するに至る。よって、助言は成功するわけであるが、それはなぜか。ここでは、助言を差し出す条件がむしろ別様に十分になっているがゆえに、成功を収めたとみなせるだろう。

その根拠は、いくつかの点から考察できる。第一に、このシーケンスにおいては、共成員性が満足に機能する条件が満たされていない。それは、串田が的確に論じているように、共成員性がスムーズに働くためには、そのやりとりで先立ってその共成員性が参与者双方にとって利用可能となっていなければならない、という条件である〔串田 2001〕。

第二に、この発言は、〈助言者—相談者〉というカテゴリー化装置が支配的であるというシーケンス環境においてなされている。しかも、こうした環境に転換をもたらすような手続きとなる振るまいは何らなされていない。よって、かの発言は、〈助言者—相談者〉というカテゴリー装置との「区分上の一貫性」——このシーケンス環境においてなら、〈助言者—相談者〉という装置と、二人の成員を二つに分ける点で同一であるような、装置の性質——に、また同時に、この装置がもたらすカテゴリー間の非対称性に方向づけられるのが自然である。よって、ここで用いられている〈ガン経験者—ガン経験者〉という共成員性は、助言を語る資格にかんして全くの対称性をそもそももたしていない。〈助言者〉はたんなる〈ガン経験者〉ではなく、相談者が現在ある病状をすでに経過済みの経験者として自らを呈示している。つまり、ここで〈ガン経験者〉という共成員性は、むしろ〈ガンを経験済の者—ガンを経験中の者〉としてたち現れている。つまり、非対称性を担保にしたうえで対称性がもたらさ

れているのである。この〈経験済の者—経験中の者〉という非対称的なカテゴリー対によってなら、もたらされるのは、やはり〈知識〉、さらには〈経験〉を語る資格の非対称性である。したがって、〈助言者—相談者〉という装置が持つ非対称性は、〈助言者〉が〈経験済の者〉であり、〈相談者〉が〈経験中の者〉である限り、維持されるだけでなく、かえって強固にされている。

いっぽうで、この発言の時点では、これに先立つ共成員性は利用可能となっていない以上、非対称的な共成員性という特徴を持つこの装置は〈経験済の者〉という自己呈示をとおして、〈助言者〉によって初めて投げかけられたにすぎない。そうである以上、この投げかけられた非対称的な共成員性の働きは、その後のやりとりにも左右されることになる。〈相談者〉は10行目で、まず、若干の沈黙をはさみ、それにつづいて「えっ何の保険です（か）」という聞き返しを行う。これは、〈助言者〉を〈ガンを経験済の者〉として認めつつ、その詳細を尋ねるものとみなせる。つまり、投げかけられた非対称的な共成員性は受容され、かのシーケンス環境の下で働くものとなっていくのである<sup>(12)</sup>。

さて、こうした重層化されたカテゴリー化装置の下になされている、ここの振るまいは多少は複雑である。この断片において〈助言者〉は、〈相談者〉がガン保険に入れないことを主張し、〈相談者〉の方でも「あもずっと入れない」と確認の質問をする形で理解を示す。この確認質問にたいして〈助言者〉は相談者を含めた加入不可能者を一般的に定式する。これを受けて〈相談者〉は「あ保険」と言いはじめている。この発話は、確認のやりとりを受けて、自分が理解したことを示そうとしているようにとれる。つまり、〈相談者〉は、自らの質問にたいする〈助言者〉の答えを事実として受け入れ始めている。しかし、〈相談者〉がガン保険にもはや加入できないという事実は深刻に残念なことでもあり、できればどうにかしたいことである。よって一つの解決策として、〈助言者〉は理解を示すこの発話に介入して、普通の保険に加入できることを伝えているようにとれる。

ところが、この〈助言者〉の発言にたいして〈相談者〉は「あ〜」と述べるだけである。したがって、〈相談者〉の方では途切れてしまった理解呈示を再開しただけかもしれないが、一つの解決策を示した〈助言者〉からすれば、「あ〜」は、その解決策への〈不満〉あるいは、そのような解決しか残されていないことへの〈後悔〉の表明ととれるのである。

自らもガン患者であったことを告げる先の発言は、このような「あ〜」を受けてなされている。こうしたシーケンス環境の下で、非対称性の中に対称性を組み込む装置が配置されることは、助言の有効性にたいして大きな意義を持つ。まず共成員性によって、同種の〈不満〉や〈後悔〉といった〈経験〉をした／してもよかった者は、その〈不満／後悔の解決策〉についてなら、現在そうしている者と言わば同じ資格の下に語ることができる。しかも〈経験済の者〉ならば、〈経験中の者〉よりも、これらの〈解決策〉について語る資格があるとされてよいからである。

このようにして、先の発言は、〈不満〉や〈後悔〉にたいする〈諦めの促し〉として有効に働いている。実際、先に述べたように、保険やガンについての相談者の質問に答えた後で、助言者は「だあ、保険、ガン保険諦めて、でもおあの、元気になったらまた簡易保険でも入ったらよろしい」と述べている。この明示的に諦めをうながす、解決策としての助言は、すでに先の発言に暗示されていたことにダメ出しをしているのである。かくして〈助言者〉は、〈相談者〉から「はい、わかりました」という助言の〈受諾〉を取りつけるのである。

#### 4 結びに代えて

本稿では、大別すれば2つのことを論じてきた。1つは、エスノメソドロジーをその分析方法や分析態度を基準として、プロト・エスノメソドロジー／エスノメソドロジー／分析的エスノメソドロジー／ポスト分析的エスノメソドロ



ジーという4つに区別することが、エスノメソドロジーをさらに進展させるのに有益であるということである。もう1つは、分析的エスノメソドロジーとして位置づけた会話分析の制約の1つである「手続き上の帰結の問題」は、MCDのようなコンテキストに関わる日常語を導入することに否定的であるけれども、とくに言語をベースとした相互行為場面における成員の実践の記述の解明を志すのであれば、「手続き上の帰結」を制約とはみなさず、分析課題の1つとして捉え、シーケンスにかんするその知見とMCD双方を用いながら、分析を施していく研究プログラムをたてることもできる、ということである。そして、このプログラムに若干の具体的例証を与えた。

この、シーケンスの組織化にかんする知見とMCDを併用した分析の提案は、微弱ながらも、実践的行為の外側に理解可能な理論的立場があるという見取りを拒否し、その内側からの理解可能性を求めて「成員の記述」という現象に取り組んでいく方向性のうちにあると言えるだろう。この意義で、この試みは、相互行為をとおしてなされる実践活動におうじた、固有の妥当性要件を満たす方法の模索であると言えるだろう。さらに、このことが認められるのなら、上記の分析方針の下に行った電話相談の分析は、方法にかんする固有の妥当性要件を意識した、ポスト分析的エスノメソドロジーの匂いをまとった研究とも言えないだろうか。もちろん、会話分析による知見産出の生産性をふまえても、分析的エスノメソドロジーたる会話分析がポスト分析的エスノメソドロジーへと移行する必要など全くない。ここで示したのは、思想史に由来するテーマたる認識トピック——観察、測定、表象、再現、説明など——の探究以外にも、方法にかんする固有の妥当性要件にそったかたちでポスト分析的エスノメソドロジーを進めるやり方があり、しかもそれは、分析的エスノメソドロジーたる会話分析をその出発点として利用し、また分析道具の一つとしても依拠するものである、ということである。

注

- (1) なお、これから論じていくように、エスノメソドロロジーの多様な発想をいくつか共有しているからといって、期待破棄実験の手法と会話分析の技法とには連続性がないし、会話分析の技法と人種・階級・ジェンダーといった、いわゆるマクロな社会構造に由来する属性との間には強い緊張関係がある。よって、ギデンズの教科書的説明は少なくとも二重の誤解を招く恐れがある。
- (2) なお、選択の根拠は、決定条件の精緻化と重なる点もあるとみなせるが、前者は常識的合理性に、後者は科学的合理性に割り振られている。したがって、ここで取り上げた同一著書内の2つの論文で矛盾が生じていると言える。
- (3) 詳しくは、[Lynch 1988] [中村 2014 : chap.3] を参照されたい。なお、『エスノメソドロロジー研究』7章 [Garfinkel 1967e] においては、統計調査という研究活動が、「調査対象」とされる人々の活動の合理性を剥ぎ取りながら、どのように産出されていくのかを詳細に検討している。よって、こうした社会科学方法論にたいする批判を、エスノメソドロロジーが科学活動を研究対象としていく萌芽として捉えることができるだろう。
- (4) [Garfinkel 1967b] は1964年に『Social Problems』誌11号 (225-250) に掲載されたものの再録である。
- (5) 本稿とは、かなり異なるかたちでエスノメソドロロジーと会話分析を関係づけたものとして、ウィルソンの論稿 [Wilson 2012] を挙げることができる。これにかんしては、[中村 2014 : chap.1] を参照。結論だけ述べておけば、ウィルソンによる関係づけはエスノメソドロロジーの発展にとって有益とは言えない。
- (6) なお、格率のもう一つのタイプは「聞く者の格率」であり、これは基本的には、書かれた語の連なりの理解可能性にかんするものと捉えられる。また、さらには、母集団全員をカテゴリー化することのできる装置 (Pn 適合的な装置1型) と関わらせながら、いくつかの規則 (カテゴリー適切使用規則1, 2や繰り返し使用可能性規則など) も定式されている [Sacks 1972a=1989 : 99, 104, 109-110]。
- (7) なお、こうした主張は、ガーフィンケルの言う「シルズの不満」(本節第3項を参照) にたいするシュゲロフなりの扱いとみなせる。このシュゲロフの主張は、これから論じていくように、場面ごとの相違、ならびにレリヴァンスというものをあまりにも物象化してしまっている。
- (8) 秩序という語につけられた\* (アスタリスク) は2つのことを意味している。1つは、秩序だけでなく、論理、目的、合理的行為、証明などなどの知の歴史における無限のトピックの代用として用いられているということである。もう1つは、そうしたトピックに「日常社会の働きにおいて／から成るものとして」という修飾語句が付け

加えられている，ということである [Garfinkel 1990 : 103]。

- (9) なお，この逸話にたいして，会話分析を推進させてきた E. シェグロフはガーフィンケルとは異なる主張をしていることも重要である [Schegloff 1989 : 217]。
- (10) MCD という装置も会話分析の技法もサックスによる知見ではあるけれども，少なくともサックスは MCD という装置と会話分析の技法とを——同時に——併用していくことに次第に消極的になった。MCD に関わる主要論文においては，その掲載にあわせて「本稿は，あくまで会話データを取り扱う最初の試みであったこと，そして必ずしも私の現在の仕事を代表するものではないことを強調しておきたい」[Sacks 1972a=1988 : 95] と冒頭に記されてもいる。なお，この同時併用による分析が施された最初の研究として，山崎らによる車椅子利用者の購買場面の研究を挙げることができる [山崎ほか 1993]。ただし，「手続き上の帰結」への言及はなされていない。また，[串田 1999] も参照されたい。
- (11) [中村 2014:chap.2] で論じたものの一部である。詳しくは，そちらを参照されたい。
- (12) 本節で取り扱った事例とは対照的に，非対称性が全く逆転してしまうような装置が投げかけられ，この装置がきたす齟齬を消失させる手続きがとられる場合もある [西阪 1999]。

## 参考文献

- Barnes, B. & S. Shapin (eds.) 1979 *Natural Order: Historical studies of scientific culture* Sage
- Bittner, E. 1967 "The police on skid row: a study of peace keeping," *American Sociological Review* (32) : 699-715
- Bloor, D. 1976 *Knowledge and Social Imagery* Routledge & Keagan Paul 佐々木・古川 (訳) 『数学の社会学』培風館 1985
- Coulthard, M. 1985 *An introduction to discourse analysis* (2nd edition) 吉村・貫井・鎌田 (訳) 『談話分析を学ぶ人のために』世界思想社 1999
- Derrida, J. 1967 *L'Écriture et la différence Editions du Seuil* 野村 (訳) 「人文科学の言語表現における構造と記号とゲーム」『エクリチュールと差異』(下) 1983 : 209-238
- Garfinkel, H. 1963 "A conception of and experiments with 'trust' as a condition of stable concerted actions," Harvey, O. (ed.) *Motivation and Social Interaction* Ronald Press : 187-238
- Garfinkel, H. 1964 (=1967b) "Studies of the routine grounds of everyday activities," *Social Problems* (11) : 225-250 西阪・北沢 (訳) 「日常活動の基盤」『日常性の解剖学』マルジュ社 1989 : 31-92
- Garfinkel, H. 1967a "What is ethnomethodology?," *Studies in Ethnomethodology*. Prentice

Hall : 1-34

- Garfinkel, H. 1967c "Some rules of correct decision making that jurors respect," *Studies in Ethnomethodology* Prentice Hall : 104-115
- Garfinkel, H. 1967d "'Good' organizational reasons for 'bad' clinic records," *Studies in Ethnomethodology* Prentice Hall : 186-207
- Garfinkel, H. 1967e "Methodological adequacy in the quantitative study of selection criteria and selection activities in psychiatric outpatient clinics," *Studies in Ethnomethodology* Prentice Hall : 208-261
- Garfinkel, H. 1967f "The rational properties of scientific and common sense activities," *Studies in Ethnomethodology* Prentice Hall : 262-283
- Garfinkel, H. 1974 "On the origins of the term '*ethnomethodology*,'" Turner, R. (ed.) *Ethnomethodology* Penguin : 15-18185 山田・好井・山崎 (訳) 「エスノメソドロジー命名の由来」『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房 1987 : 9-18
- Garfinkel, H. 1990 "Evidence for locally produced, naturally accountable phenomena of order\*, logic, reason, meaning, method, etc. in and as of the essential quiddity of immortal ordinary society ( I of IV ) : An announcement of studies," *Sociological Theory* (6) : 103-109
- Garfinkel, H. 1996 "Ethnomethodology's Program," *Social Psychology Quarterly* (59) : 5-21
- Garfinkel, H. & H. Sacks 1970 "On formal structures of practical actions," McKinney, J. & E. Tiryakian (eds.) *Theoretical Sociology* Appleton Century Crofts : 337-366
- Garfinkel, H., M. Lynch, E. Livingston 1981 "The work of discovering science construed with materials from optically discovered pulsar," *Philosophy of the Social Sciences* (17) : 131-158
- Garfinkel, H. & L. Wieder 1992 "Two incommensurable asymmetrically alternate technologies of social analysis," Watson, G. & R. Seiler (eds.) *Text in Context: Contributions to Ethnomethodology* Sage : 175-206
- Giddens, A. 2001 *Sociology (Fourth Edition)* Polity Press 松尾ほか (訳) 『社会学 (第4版)』而立書房 2001
- Heath, C. & P. Luff 2000 *Technology in action* Cambridge University Press
- Knorr-Cetina, K. 1981 *The Manufacture of Knowledge: An essay on the constructivist and contextual nature of science* Pergamon Press
- 串田秀也 1999 「助け舟とお節介——会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」好井・山田・西阪 (編) 『会話分析への招待』世界思想社 : 124-147
- 串田秀也 2001 「私は－私は連鎖」『社会学評論』52巻2号 : 36-54

- Latour, B. & S. Woolgar 1979 *Laboratory Life* Princeton University Press
- Levi-Strauss, C. 1966 *The Savage Mind* University of Chicago Press 大橋 (訳)『野生の思考』みすず書房 1976
- Lynch, M. 1985 *Art and Artifact in Laboratory Science* Routledge and Keagan Paul
- Lynch, M. 1988 “Alfred Schutz and the sociology of science,” Embree, L. (ed.) *Worldly Phenomenology* Center for Advanced Research in Phenomenology & University Press of America : 71-100
- Lynch, M. 1993 *Scientific Practice and Ordinary Action* Cambridge University Press 水川・中村 (監訳)『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房
- Lynch, M. 2000 “The ethnomethodological foundations of conversation analysis,” *Text* (20) : 517-532
- Lynch, M., E. Livingston, H. Garfinkel 1983 “Temporal order in laboratory work,” Knorr-Cetina, K. & M. Mulkay (eds.) *Science Observed* Sage : 205-238
- 西阪仰 1997「異文化性の社会的構成」『相互行為分析という視点』金子書房
- 西阪仰 2012「指示に従った知覚——強調プラクティスと方法的手続き」エスノメソドロジー・会話分析研究会2012年度研究大会（於北星学園大学 11月2日）報告
- Sacks, H. 1972a “An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology,” Sudnow, D. (ed.) *Studies in Social Interaction*. The Free Press 北澤・西阪 (訳)「会話データの利用法」『日常性の解剖学』マルジュ社 1989 : 93-173
- Sacks, H. 1972b “On the analyzability of the stories by children,” Gumperz, J. & D. Hymes (eds.) *Direction in Sociolinguistics* Holt, Rinehart and Winston
- Sacks, H. 1992 *Lectures on Conversation 2 vols.* Basil Blackwell
- Schegloff, E. 1987 “Between Micro and Macro: contexts and other connection,” Alexander, J. (ed.) *The Micro-Macro Link* University of California Press : 207-234 石井 (訳)「ミクロとマクロの間」『ミクロ・マクロ・リンクの社会理論』新泉社 1998 : 119-138
- Schegloff E. 1989 “From Interview to Confrontation: Observations of the Bush/Rather Encounter,” *Research on Language and Social Interaction* (22) : 215-240
- Schegloff, E. 1991 “Reflections on Talk and Social Structure,” Boden, D. & D. Zimmerman (eds.) *Talk and Social Structure* Polity Press : 44-70
- Schegloff, E. 2002 “Accounts of conduct in interaction: interruption, overlap, and turn-taking,” Turner, J. (ed.) *Handbook of Sociological Theory* Plenum : 287-321
- Schegloff, E. 2007 “A tutorial on membership categorization,” *Journal of Pragmatics* (39) : 462-482
- Schegloff, E. & H. Sacks 1972 “Opening up closings,” *Semiotica* (7) : 289-327 北澤・西阪

- (訳)「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学』マルジュ社 1989 : 175-241
- 山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正 1993 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力  
——〈車椅子使用者〉のエスノメソドロジー的研究——」『社会学評論』44号 1 巻 :  
30-45
- Wieder, L. 1974 *Language and Social Reality: the case of telling the convict code* Mouton
- Wilson, T. 2012 “Classical ethnomethodology, The Radical program, and Conversation  
Analysis,” Hisashi, N. & F. Waksler (eds.) *Interaction and Everyday Life* Lexington  
Books : 207-238
- Zimmerman, D. 1984 “Talk and its occasion: the case of calling the police,” D. Schiffrin  
(ed.) *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic applications* Georgetown University  
Press : 210-228
- Zimmerman, Don & C. West 1975 “Sex roles, interruption, and silences in conversation,”  
Thorne, B. & N. Henley (eds.) *Language and Sex: Difference and dominance* Newbury  
House : 105-129